

佐藤春夫による「好逑伝」初訳と改訳の比較

劉, 鳳軍
景德鎮陶磁大学 : 助教

<https://doi.org/10.15017/2200467>

出版情報 : *Comparatio*. 22, pp.27-36, 2018-12-28. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

佐藤春夫による「好速伝」初訳と改訳の比較

劉 鳳軍

問題提起

佐藤春夫の「好速伝」は一九四二年十月十七日に、奥川書房から刊行されたもので、中国で有名な長篇小説「好速伝」の翻訳である。原典の「好速伝」は明代に書かれた十八回からなる章回体白話小説である。作者については「名教中人」という筆名しか知られてない。佐藤は、それ以前の一九二八年二月一日、三月一日、四月一日発行の『苦楽』（第七卷第二号、第三号、第四号）に「好速伝——名、俠義風月伝——」の題目で翻訳を三回連載しているが、これは「好速伝」の第二回までの翻訳で、未完であった。一九四二年に単行本で出たのは改訳になる。二つの訳文の関係については、中村三代司の「好速伝」解題」における「両者の間には訳出態度に大きな相違が見られる」（注1）という指摘が今まで唯一のものであるが、どのように違っているのかについては、具体的に論じられていないので、ここで、比較を通して、二つの訳文の違いを整理した上で、それらの違いの由来を検討してみたい。

混乱を避けるために、中国の「好速伝」、一九二八年に雑誌『苦楽』に連載された「好速伝——名、俠義風月伝——」と一九四二年

に奥川書房から刊行された「好速伝」をそれぞれ、原典、初訳と改訳に略記することにする。「好速伝」の粗筋は次のようである。

元代、北直隸大名府の鉄中玉という人品容貌とも優れた男が、韓願という秀才の娘であった韓湘弦を攫い、父の鉄英を陥れた高官大夫侯の横暴を懲らしめ、その後山東の済南府に行った。そこでは水居一の娘の水氷心が叔父の水運に無理やりに太学生の子息を過其祖と結婚させられようとしていたが、水氷心は水運の娘香姑が自分と同年齢なのを利用して、自分の庚帖八字を操作して香姑を過其祖に嫁がせた。過其祖はなおも水氷心を誘拐しようとしたが、鉄中玉は水氷心を救出して、彼女と結婚した。

一、初訳と改訳との比較

(1) 原典…話説前朝北直隸大名府、有一個秀才、姓鐵、雙名中玉、表字挺生。『中国歴代禁毀小説海内外珍蔵秘本集粹』第四輯「好速伝」、雙笛國際事務有限公司出版部、一九九五年八月、三七頁。以下は頁数だけを示す。

初訳…さて、前の朝廷宋の時代の事、北直隸の大名府に一人の秀才があつた。姓は鉄双、名を中玉、字を挺生といつた。(四三一頁)(注2)

改訳…さて、前の朝廷(元のこと)のこと、北直隸の大名府に一人の秀才があつた。苗字は鉄、名は二字名で中玉、字は挺生と言つた。(一三九頁)

物語の時代設定については、初訳における「宋の時代」と改訳における「元」とは明らかに違う。「好逑伝」は明代の作であったため、明の「前朝」は元の時代のはずである。改訳では「元の」と「正確に訳しているが、初訳では「宋の時代の事」としているのは間違っていると思われる。

(2)

原典：「説起來、這個封頭是世代公侯、祖上曾有汗馬功勞、朝廷特賜他一所養閑堂、教他安享、閑人不許擅入。前日我侄兒在城中賣草、親眼看見他將這女子藏了進去。」鐵公子道：「既有人看見、何不報知韋相公、叫他去尋？」老官兒道：「報他何用？就是我熱心腸與韋相公說了、韋相公也沒本事去問他一声、看他一眼。」(四三頁)

初訳：「その相手敵といふのは、代々のお大名で、先祖は戦の手柄をあらはされたお方、そのためお上では特別に別荘を下されて、気楽に暮すようにとの思召しから、その別荘にはやくざな人間の出入はお差止になつてゐると申しますよ。この間、私の甥の奴が、都へ草を売りに出かけて、それがちやんと見てをつたと申します、そのお嬢さんを匿しこむところをでござりますよ」

「見た者がある以上、何故、韋さんに知らせて捜させないのだ」「知らせて何になりますものか。韋の若様はもう御承知なのですが、てんで手が出せないののでござりますよ」(四三四頁)

改訳：「この相手方と言ふのは代々のお大名で、御先祖が昔御馬前の功がお有りだったのでお上から特別に別荘を下すつて保養をおさせになる、それ故無闇なものが勝手に其の別荘へは入れないの

でござります。ところがこの間私の甥めが都にまぐさを売りに行つた時お嬢さんを其処へ匿し込む所をちやんと見たものなのでござりますよ」

「さう見た人があるのなら、何故韋の若様に知らせてあげないのだね、行つて捜しもなされように」

「教へてあげても無駄なのでさア。たとへ韋の若様がお知りになつたところで、其奴どうするわけにも行くことぢや有りませんからな」(一四三頁)

原典では、韓湘弦の隠された場所を知っているが、相手が権勢のある大夫侯なので、韋佩に教えても彼が何もできないと、爺は考えており、韋佩に知らせなかつたため、韋佩が韓湘弦の隠された場所を知らないという設定である。改訳では、「教へてあげても無駄なのでさア。たとへ韋の若様がお知りになつたところで、其奴どうするわけにも行くことぢや有りませんからな」として、正確に翻訳しているが、初訳では、韋佩が韓湘弦の隠された場所を知っているかのように、「韋の若様はもう御承知なのですが、てんで手が出せないののでござりますよ」と訳している。

(3)

原典：屈兄長縦有荆、豫快腸、崑崙妙手、恐亦救援小弟不得。(四五頁)

初訳：「それにしても小生の煩悶はとてもお打明けも出来ぬばかりよしや大兄が荆予ほどの男氣と崑崙ほどの腕前とを兼ねて居られようとも、小生をお救ひ下さることはおぼつかなさうに存ずるの

です」(四三五頁)

改訳「たとへ、あなたに昔の荆軻予讓の俠氣と異人磨勒の腕前とが有られるにしても、恐らく私をお救ひ下さることは出来ないこととせうから」(二四四頁)

原典における「荆」と「豫」はそれぞれ、荆軻と豫讓であり、二人とも中国歴史上、有名な俠客である。「崑崙」とは唐代の裴劍の「伝奇」中の「崑崙奴」に出てくる異人磨勒のことである。唐代には外国人の使用人は「崑崙奴」と呼ばれていた。磨勒は崑崙奴であり、主人公の崔生を、一目惚れした舞姫の居る邸宅へ背負って行って、二人の結合を助けた。

原典では、「荆、豫」、「崑崙」と略記しているのは、作品成立の明の時代、これらの人物なら誰も知っているためであろう。一方で、日本語に翻訳する時、改訳における「荆軻予讓」、「異人磨勒」のように詳しく述べた方が読者に分ってもらいやすいと思われる。しかし、初訳では、原典の文字どおりに「荆予」、「崑崙」としか訳されていない。文脈から、それは人名だったことが読めるが、「荆予」は一人であるか、それとも二人であるかは、日本人の読者に分って貰えるかどうかは疑問であろう。

(4)

原典「你父親問他是甚人？有何屈事？他說是個生員、叫做韓願。(四八頁)

初訳「お父様はその人たちが何人で、何がたい無実があるかそれを尋ねられた。その人は文官試験の及第者で、韓愿といふ人(四

三七頁)

改訳「お父様はその者が何人であるか、何の苦しめられてゐる事があるかをお尋ねになりました。その者が言ふには自分は秀才の一人で韓愿と呼ぶ者だと言ふのです。(二四六頁)

韓愿の身分については、原典では「秀才」と書いている。中国では、秀才は生員とも呼ばれており、文官試験の郷試に参加する資格を持つているが、まだ受験していない(または受験したが、及第しなかった)書生のことである。改訳では、原典の「秀才」をそのまま踏襲しているが、初訳では、「文官試験の及第者」と訳しているのは明らかな誤訳である。

(5)

原典「内中一個老家人見嚷得慌、只得大著膽子回說道：「公侯人家、老爺不在此、誰敢開門？就是開了門、此係朝廷欽賜的禁地、爺也不敢進去。」(六〇頁)

初訳「そのとき邸の内から一人の老家僕がわいわい騒がしいのを聞きつけて飛んで来た。そして大胆にも、「殿様はここにはおおいではない。門を開けといふのは一体何者だ。この門を開けば、ここは朝廷から賜った禁地だからこの殿様でさへも遠慮してお通りになるのだ。」(四三三頁)

改訳「その内で一人の年よつた家来が、怒鳴りつけられてよんどころなく、度胸を据ゑて言つた。

「邸の者はお殿様が御不在では誰も門を開けませんのだ。それに開けましたところで此所はお上から賜はつた禁地の地ぢや。あな

た様でもお入りにはなれますまい」(一五二頁)

原典では、門番の老人が、この邸宅は朝廷から賜った禁地なので、門を開けても、貴方は勝手に入ってはいけないというように鉄中玉に言っている。原典における「爺」は門番の老人が客の鉄中玉を礼儀正しく呼ぶ言葉である。改訳では、「あなた様」と正確に翻訳している。しかし、初訳では、「ここは朝廷から賜った禁地だからこの殿様でさへも遠慮してお通りになるのだ。」と訳し、原典における「爺」を大夫侯と誤解している。朝廷から賜った禁地であっても、主人の大夫侯さえ「遠慮してお通りになる」としているのは、おかしいと言わざるを得ないであろう。

(6)

原典・原來這大夫侯因一時高興、將韓願女兒搶了來家、也只道窮秀才家沒處申冤、不期撞見鐵御史作對頭、上疏參論、又不料聖旨准了、著刑部審問。一時急了、沒擺佈、只得將韓願夫妻一併搶來、藏在養閑堂內、以絕其跡、却上疏胡賴。初時還恐怕有人知覺、要調移巢穴、後見刑部用情、不肯力追、反轉將鐵英下了獄、便十分安心、不復他慮。(六一頁)

初訳・元來、大夫侯は一時の興から韓愿の娘を奪つて此処へ連れて来た。さうして考へるには、あの貧乏な瘦せ秀才にどうして無実を訴へるやうな真似が出来ようと。ところが思はずも鉄御史と敵視して相対する破目になり、上疏して御史を弾劾する論を参じた。また料らずも聖旨はそれを準許になり、刑部をして審問させられること、一時に急となり、もういい加減に弥縫することがで

きなくなり、仕方なく韓愿夫妻と一緒に奪つて来てこの養閑堂の内に隠し、さうして事の証跡を絶とうとした。けれども上疏を空頼みにして、初めはまた専ら人に感附かれることを恐れ、隠し場を変へようと考へてゐた。(四四三頁―四四四頁)

改訳・さて元來大夫侯は一時の酔興から韓愿の娘を邸にさらつて来たが、それも韓愿は貧乏秀才のことだから訴へ出て冤をはらす術も有るまいと思つてゐた。ところが鉄御史が此方を相手どつて来た。此方を上書して弾劾した。それがまた案外に御聴許になつて刑部に審問を命ぜられた。一時に事が急になつて来て、うまく切りぬけやうがない。ぜひなく韓愿夫妻も一緒にかつさらつて来て、この養閑堂の内に匿まひ、その行衛を分らなくしておいて、却つて上書して出鱈目な無実の主張をした。初のうちはそれでもまだ人に覺られることを恐れて、巢窟をかへようと思つたのである。(二五三頁)

原典では、大夫侯が韓湘弦をさらつたため、鉄御史は上書して大夫侯を弾劾したが、大夫侯は韓湘弦の両親を捕まえ、証拠を隠蔽した上で、上書して自分の無実を主張した。原典における「胡頼」とは、悪事をした人が、それを認めず、無実を主張するといふ意味である。

改訳では、原典に忠実に翻訳しているが、初訳では、鉄御史が大夫侯を弾劾するのではなく、大夫侯が「御史を弾劾する論を参じた」としているのは逆である。一方で、初訳における「上疏を空頼みにして」という訳文から、原典の「上疏胡頼」における「胡

頼」という言葉の意味は佐藤春夫が分らなかつたと伺われる。

(7)

原典：「此乃自治家人、何關朝廷禮法？既有旨議事、……」因叫家人帶過。鐵公子攔住、正要再問、韓願早在階下喊叫道。（六三頁）
初訳：「これは自分で家の者を取締つてゐるところぢや、朝廷の礼法に何の關係があらう。既に聖旨がありそれによつて事を取計らつて居るのぢや。」

さうして召使の者にその聖旨を持つて来させようとした。鉄公子はそれを押し止め、更に質問をつづけようとした。そのとき韓願は庭前から叫んだのである。（四四五頁）

改訳：「此は俺が自身、家來の者を取調べてをるのだ。朝廷の礼法に關はることではありません。聖旨がお有りだと言ふのであるからその事を御相談いたさねばならん」

そこで家來に韓願を引立てて行かせようとした。鉄公子はそれを遮ぎりとどめて、正に再び尋ねようとした時、韓願は既に階下に在つてわめき叫ぶのであつた。（一五四頁）

大夫侯は娘の韓湘弦との結婚を許してもらうため、父の韓願を拷問している。私刑は朝廷の法律に違反するので、それを突然にやつて来た鉄中玉にばれないように、家來に韓願を連れて行かせたという場面である。改訳では正しく翻訳しているが、初訳では、韓願を連れて行くのではなく、聖旨を持つてくるように、「召使の者にその聖旨を持つて来させようとした」と誤訳している。

(8)

原典：「若果有聖旨、不妨開讀；倘係誑詞、定獲重罪。莫若說出真情、報出真名、快快低首階前、待我等與你消釋、或者還可苟全性命。若恃強力、全憑唬嚇、希圖逃走、只怕你身入重地、插翅也難飛去。」鐵公子微笑一笑說道：「我要去、亦有何難？但此時尚早、且待宣讀了聖旨、拿全了人犯、再去也不遲。」（六七頁）

初訳：「果して聖旨があるなら読んで貰ひたい。もしそれが詐り言なら必ず重罪を得るだらう。眞実それに間違ひないとはつきり陳べることが出来ぬならば、即刻庭前の階の下に行つて低頭し我等の許しを乞へ。そうすれば命だけはやつと全うするだらう。若し強ひて嚇し文句を並べて逃走を企らむなら、貴様の身は進退谷り翼が生えるとも飛び去ることは出来なくなるだらう。」

鉄公子は「吾輩が逃げようと思へばまたどうしてむづかしいことであらう。けれども今、時期がそれには尚ほ早い。しばらく待つてくれ、聖旨を宣讀し、悪人を捕へるからそれから逃げて行つても遅くはあるまい。」（四四七頁）

改訳：「若し果して聖旨が有るなら読むに差支はないが、万一虚言だと必ず重罪を蒙るぞ。それより目算を白状し、名前を名乗つて、速かに階前に首を下げて我々の口添へを待たがよい。或はまた生命が助かるかも知れん。若し飽く迄強顔に嚇しつけて、逃げ出さうと思ふと、恐らくお前さんの立場はむづかしくなつて来て、ぢたばたしてもあがきのつかんことになりはせんのかな」

鉄公子は笑つて、言つた。
「私は此の場を立ち去らうと思へばそれもわけはないのです。ただ、今はまだ早い。まア聖旨を読んで、人々を捕へてしまつて、

それから立ち去つても遅くはありませんからな」(一五七頁)

もし聖旨がなければ、真実な事情を白状し、本当の名前を名乗り、頭をさげて謝ったほうがいいと侯伯たちが鉄中玉に言っているのが原典での設定である。改訳における「目算を白状し」という訳文は原典における「説出真情」を正確に訳出したものである。それに対して、初訳では、「真実それに間違ひないとはつきり陳べることが出来ぬならば」として、否定(出来ぬ)＋仮説(ならば)に変えられている。改訳で示したように、原典における「莫若」という言葉は「それより…ほうがいい」という意味合いである。一方で、「莫」と「若」はそれぞれ否定と仮説を表すので、初訳では、「莫若」という言葉を「出来ぬならば」と誤解したのではないか。

また、「讀了聖旨、拿全了人犯、再去也不遲。」における「去」とは立ち去るという意味である。改訳ではそれを正しく訳しているが、初訳では、「逃げ」としている。

(9) 原典…推官讀完了聖旨、鐵御史謝過恩、忙立起身、欲與衆侯伯相見。不期衆侯伯聽見宣讀聖旨、知道大夫侯事已敗露、竟走一個乾淨。(六九頁)

初訳…推官は聖旨を読み終つた。鉄御史は天恩の厚きを謝し、急に身を起こして侯伯たちと相見えようと思つた。偶然にも侯伯たちは聖旨の宣讀をきき、大夫侯の悪事が已に露見したのを知り、

遂に逃げ出し、ひっそり閑とし、数多の家僕はみな次第に姿をかくしてしまつた。(四四八頁)

改訳…推官は聖旨を読みたつた。鉄御史は天恩を感謝して、急ぎ身を起こして、数多の大名たちと挨拶しようとした。ところが大名たちは聖旨の宣讀を聞いて、大夫侯の悪事の既に失敗し露顯したことを知り、とうとう一人残らず綺麗に逃げ出してしまつてゐた。(一五八頁)

原典では、聖旨が読まれた後、鉄御史は侯伯たちに挨拶しようとしたが、侯伯たちが既に逃げ去つてしまつたという設定であり、原典における「忙」とは「急いで」、「慌てて」という意味合いである。改訳では、それを「急ぎ」と正確に訳しているが、初訳では、「急に」としているのは正しくないとと思われる。

一方で、「不期」という言葉は、「計らず」または逆接関係を表す言葉に訳したほうがいいと思われる。改訳で、「ところが」と訳しているのは妥当であるが、初訳では、それを「偶然にも」としているのは正確ではないと言わざるを得ない。

(10) 原典…鐵御史去後、大夫侯款待推官、急托權貴親友、私行賄賂、到刑部與内閣去打點、希圖脫罪不題。(七一頁)

初訳…鉄御史の去つた後、大夫侯は推官を款待し、その間に急に権勢があり高貴の地位に居る友人に託し、秘に賄賂を贈り刑部と内閣とに行つて運動してもらひ罪を脱れようと図つた。(四五〇頁)

改訳…鉄御史が去つた後、大夫侯は推官をもてなして、急いで権勢のあり、身分の高い親友に頼み、ひそかに賄賂をつかつて、刑部と内閣へうまくしらへさせて、罪を脱れようと計画するのであつた。(一六〇頁)

原典における「急」という言葉は前項(9)の「忙」と同じく、「急ぎ」という意味合いである。改訳では、それを正確に翻訳しているが、初訳では、「急に」として、文脈を混乱させてしまった。つまり、初訳において、原典の「急」という言葉を正確に理解できなかつた。

(11)

原典…却説刑部雖受了大夫侯的囑託、却因本院捉人不出、涉於用情、不敢再行庇護。(七二頁)

初訳…さて刑部は大夫侯からの運動をうけたけれども、而も刑部が直接罪人を挙げたのではなく事情止むなく刑部の手にわたした事件だから、今度は強ひて十分大夫侯を庇護するわけには行かない。(四五〇頁)

改訳…さて一方刑部では大夫侯からの運動を受けたけれども、然し彼の人々を捉へ出せなかつたことがもう依怙ひいきしたらしく見られるところであるから、その上十分にかばふわけにはいかなかつた。(一六〇頁)

刑部は大夫侯の頼みを受けたが、彼を庇うことができなかった。その原因は前の「刑部の人達も彼の頼みを受けてさして追究もし

ないどころか、反つて鉄英を牢に入れてしまった」(一五三頁)という点にある。つまり、悪人の大夫侯を既に一回庇つたので、悪事が発覚してこれ以上庇護できなくなった。改訳では、それを正確に訳しているが、初訳で、その原因を「刑部が直接罪人を挙げたのではなく事情止むなく刑部の手にわたした事件だ」としているのは原典との相違が明らかである。

(12)

原典…鐵公子到了家中、不期大名府也盡知鐵公子打入養閑堂、救出韓願湘弦之事。又見鐵御史升了都察院、不獨親友殷勤、連府縣也十分尊仰。(七四頁)

初訳…鉄公子は家に着いた。意外にも故郷の大名府では皆が鉄公子が養閑堂に打ち入り韓湘絃を救ひ出した事を知つてゐた。又鉄御史が都察院に陞されたことも知れてゐて独り鉄公子の親友達が歓迎したのみならず、府県の役所からさへも大に尊仰された。(四五二頁)

改訳…鉄公子は家郷に帰つた。ところがこの大名府でも皆鉄公子が養閑堂に乗り込んで、韓湘絃を救ひ出した事を知つてゐた。また鉄御史が都察院に陞したことも知つてゐる。親戚朋友が親切にするだけではない。府県の役人達までも極めて敬意をはらつて来る。(二六二頁)

中国語における「親友」とは、親類と友達を指す一方、日本語における「親友」とは最も親しい友達であり、親類という意味が含まれていない。改訳における「親戚朋友」という訳文は原典に

忠実であるが、初訳では、原典の中国語の「親友」を文字通りに踏襲し、「親友」と訳しており、訳者は「親友」という言葉における、中国語と日本語との間の相違を知らなかったのではないか。

総じて言えば、初訳には、誤訳が散見するが、改訳では、それらの誤訳が直されており、原典に忠実である。初訳における誤訳の原因は二つ挙げられると思われる。一つは、初訳当時(昭和三年)、佐藤春夫の中国文化への理解はそれほど深くなかったことである。明の「前朝」を「宋の時代」と誤解したり、原典における「生員」を「文官試験の及第者」と誤解したりしたのはその例であろう。

いま一つは初訳当時、佐藤春夫の白話の読解力が低かったことである。原典の「好速伝」の文体は古代の文語と現代語が混じっている白話であり、漢文力を持っている佐藤春夫にとつて、文語は読みやすいが、現代語の部分は読みづらかったであろう。そのため、原典における「胡頼」、「急」、「忙」などの現代語を理解できなかつたと思われる。一方で、初訳とほぼ同じ時期に翻訳された「平妖伝」(『世界大衆文学全集』第二五巻 改造社 昭和四年一二月)の原典も白話文体であり、その訳文に「好速伝」におけるそれと同じような誤訳が見られる(注3)のも佐藤春夫の当時の中国文化への理解力と中国白話への読解力の程度を裏付けていると思われる。つまり、初訳と改訳との間に見られる相違の由来は、中村三代司の指摘した佐藤春夫の翻訳「態度」の相違ではなく、翻訳当時の彼の中国文化の理解力と白話の読解力の相違であると思われる。

二、連載の中止と改訳の動機

先に述べたように、初訳は『苦楽』という雑誌の第七巻第二号(一九二八年二月)、第三号(一九二八年三月)と第四号(一九二八年四月)に三回しか連載されていない。初訳の第一回の冒頭における、佐藤春夫による序文に「この仕事に就いては増田涉君が勉強の時間を割いて助力をしてくれる。記して感謝する。」(四三一頁)という断りがある。一方で、増田涉は「佐藤春夫と魯迅」で、次のように回想している。

私はやがて佐藤氏の中国小説翻訳の下訳をしたり、必要な資料をさがして提供したりするようになった。(中略)劉による)翻訳でやや大きいものは改造社『世界大衆文学全集』に入った『平妖伝』で、これは原稿紙にして千枚くらいはあったと思うが、私は毎月、百枚くらいずつ訳して佐藤氏のところを持って行った。ほかに『好速伝』を訳したが、はじめの部分だけに終わった。『苦楽』という雑誌に一、二回出たように思うが、雑誌がつぶれて、そのままになったからだ。(増田涉「佐藤春夫と魯迅」、『図書』第一七九号、一九六四年七月、三〇頁。)

増田涉は雑誌『苦楽』に連載された「好速伝」一名、俠義風月伝―、即ち本稿における初訳の下訳を行なったことが分る。また、連載中止の原因は雑誌『苦楽』の廃刊にあると、増田涉は考えて

いる。雑誌『苦楽』については、『モダンイズム出版社の光芒—プラ
トン社の一九二〇年代』で次のように述べられている。

『苦楽』は大正一三（一九二四）年一月に創刊され、昭和三
（一九二八）年五月に廃刊となるまで、全七巻五三冊が発刊さ
れている。中山太陽堂社史『クラブコスメチックス八〇年史』
ではその廃刊を昭和二年一月としたため、それが通説となっ
ているが、調査の結果、『女性』と同じく昭和三年五月で第七巻
第五号が終刊号であることが分った。『女性』も『苦楽』も何の
前触れもなく、連載ものは途中で断ち切れたままに終わってい
るので終刊号は判然としないのだが、関係者の記述などを総合
すると、両雑誌とも昭和三年五月号が最終であることに間違い
はない。（小野高裕・西村美香・明尾圭造『モダンイズム出版社の
光芒—プラトン社の一九二〇年代』、淡交社、平成二二年六月、
一五六頁。）

つまり、初訳の第三回は第七巻第四号に掲載されている一方、
次号の第七巻第五号は終刊号になるため、連載の中止は雑誌の廃
刊に原因するという増田渉の発言は妥当なように見えるが、再考
の余地があると思われる。

『苦楽』第七巻第四号に掲載された初訳の第三回の末尾に「つゞ
く」（四五二頁）という断りがある。一方で、次号の『苦楽』第七
巻第五号（一九二八年五月、終刊号）「編集後記」に次のように書
いてある。

中村武羅夫氏の『地獄の花嫁』、加藤武雄氏の『面影』共に愈
よ本舞台に入り、白石実三氏の『瀧夜叉姫物語』は来月号より
は続篇『相馬古御所』として、筆を新たにして続稿さるゝ筈で
すから層一層御期待下さいまし。

牧逸馬氏の『白仙境』は本号を以て大好評裡に完結を告げま
した。只残念なことは佐藤春夫氏の『好速傳』が本誌に掲載出
来なかつた事です。『苦楽』第七巻第五号、一九二八年五月、
三八〇頁。）

初訳の連載中止は増田渉の指摘したように、『苦楽』の廃刊に原
因するならば、終刊号の第七巻第五号には、「只残念なことは佐藤
春夫氏の『好速傳』が本誌に掲載出来なかつた事です。」という連
載中止の知らせではなく、初訳のつづき（第四回）が掲載される
はずであろう。つまり、増田渉の発言はそのまま信じてることが出
来ない。

一方で、雑誌『苦楽』の終刊号の第七巻第五号には連載中止の
知らせは見えないが、中止の原因については言及されていない。そ
のため、初訳の連載中止の原因について検討する余地がまだある
と思われるが、残念なことに、佐藤春夫の随筆、年譜や書簡など
を調べたけれども、手がかりは見つからなかった。
一方で、初訳の第一回の冒頭に次の一文がある。

これは明の時代の世態を描いた支那の長篇小説である。支那

でも第二才子などとも称せられてはゐるが、国内でよりも卻つて欧州諸国で持囃され仏独英等の各国にそれぞれ二三種の訳本がある¹⁾と聞いてゐる。題名の意は詩経の窈窕タル淑女ハ君子ノ好逑から出たのは申すまでもない。十八回、約七百枚、今年一ぱいかかるだらう。(四三二頁)

こういった言及から、佐藤春夫が中国の「好逑伝」を最初に(一九二八年)翻訳した動機がわかると思われる。つまり、「好逑伝」は中国で有名である一方、欧州で持て囃されている。しかし、日本語訳には萩原広道の「通俗好逑伝」(一七五九年)があるが、それは「好逑伝」(全十八回)の第五回までの翻訳で、全訳ではない。それまで、まだ全訳のなかった「好逑伝」を訳して、日本の読者に紹介するのが佐藤春夫の目的ではなかったか。

しかし、何らかの原因で初訳の中止を余儀なくされたため、「好逑伝」を日本の読者に紹介するという目的を達成できなかった。後に(一九四二年)、この目的を達成させるために、「好逑伝」をもう一度翻訳したのではないか。

結び

初訳には、誤訳が散見する。例えば、原典の物語の時代設定が元の時代であるのに対して、初訳では、「宋の時代」と誤訳しており、原典における「忙」、「不期」はそれぞれ「急いで」、「ところが」という意味合いであるが、初訳では、それを「急に」、「偶然にも」と訳している。一方で、改訳では、これらの誤訳は正確に

直されている。換言すれば、初訳には誤訳が多く見られるのに対して、改訳は原典に忠実であると言える。初訳と改訳の間に見られるこういった相違の由来、即ち初訳における誤訳の由来は、初訳当時の佐藤春夫の中国文化の理解力と白話の読解力の不足にあると思われる。

【注記】

(注1) 『定本佐藤春夫全集』第三十二巻、臨川書店、一九九九年十二月、四二四頁。

(注2) 本稿では、初訳の「好逑伝——一名、俠義風月伝——」と改訳の「好逑伝」に関する引用は何れも『定本佐藤春夫全集』第三十二巻(臨川書店 一九九九年十二月)に拠り、以下は頁数だけを示す。

(注3) 張文宏『佐藤春夫と中国古典——美意識の受容と展開——』和泉書店 二〇一四年九月。

【付記】本論文は二一〇八年度景德鎮市社会科学計画課題「清代小説『好逑伝』の經典化研究——以其在国外的傳播为视角」の研究成果である。